

旧門司税関

1912年に建てられたこの税関は、1909年に建てられたが間もなく焼失した税関に代わるものであった。戦時中の焼夷弾爆撃で屋根が破壊された後、この建物は長い間、板張りの空き家となっていた。1991年から修復が始まり、1995年には門司港の歴史地区の一部として再オープンした。現在では果物をテーマにしたカフェや、税関の取り締まりや密輸に関する展示がある公共スペースになっている。税関職員が探す違法薬物や、密輸業者がそれを隠そうとしたさまざまな方法についての展示もある。

この建物は、明治時代（1868-1912）の著名な建築家、妻木頼中（1859-1916）の作品である。突き出たドーマー窓や屋根に沿った石彫りのコーニスは、いずれもネオ・ルネサンス様式建築の特徴であり、シャンデリアも同様である。内壁はかつて白い漆喰で覆われていたが、元の煉瓦造りを露出させるために取り除かれた。

建物の3階には、海岸に面した一角に小さな展望室がある。そこからは門司のウォーターフロントと歴史地区の一角が見渡せる。